

## フランスの高等教育機関における日本語教育（出張報告）

谷口龍子

### 日程

2010年3月15日（月）出発

2010年3月16日（火）シャルル・ド・ゴール空港着

午後：パリ・ディデロ第7大学訪問

大島弘子氏（パリ・ディデロ第7大学東洋言語文化学部日本語科准教授）と面談

2010年3月17日（水）移動：パリ→グルノーブル

午後：グルノーブル・スタンダール第三大学訪問

東伴子氏（グルノーブル・スタンダール第三大学外国語学部東洋言語学科日本語科准教授）と面談

2010年3月18日（木）移動：グルノーブル→パリ

2010年3月19日（金）

午後：フランス国立東洋言語文化大学訪問

上田眞木子氏（フランス国立東洋言語文化大学日本語科准教授）と面談、授業見学

2010年3月20日（土）移動：パリ→エクサン・プロバンス

午後：エクサン・プロバンス市内でユキ・ファブネク氏（プロバンス大学日本語科准教授）秋廣尚恵氏（プロバンス大学日本語科専任講師）と面談

2010年3月21日（日）移動：エクサン・プロバンス→パリ

2010年3月22日（月）

午前：国際交流基金パリ日本文化会館訪問

近藤裕美子氏（国際交流基金パリ日本文化会館日本語教育アドバイザー）と面談

2010年3月23日（火）出発 AC1 シャールル・ド・ゴール空港発

2010年3月24日（水）帰国

## フランス全体の高等教育機関における日本語教育の概況

フランスは欧州の高等教育機関において最も日本語学習者が多い国（8,248人、国際交流基金資料、2009年）だが、主専攻としている者は半分ほどであり、遠隔地教育が盛んであることも特色である。

中等教育ではCEFRに準じた日本語のスタンダードが出来つつあるが、高等教育機関では、各大学が試行錯誤で基準を作成しているのが現状である。

現政権は、「有益な学問」を優先させる政策をとっており、語学を含む人文系の学問はあまり優遇されていないという。日本学に関しては、たとえば古典研究ではなく、少子化や労働問題など社会、経済など生活に密着した研究に予算が付きやすい。

なお、日本語の高等教育資格試験（Agrégation）は不定期的であり、中等教育資格試験（CAPES）は存在しない。

### 学会組織

フランス日本研究学会(Société française des études japonaises)：日本研究のあらゆる分野を網羅している。

フランス日本語教師会(AEJF (Association des Enseignants de Japonais en France):会員は約150名。

### パリ・ディデロ第7大学 Université Paris Diderot

インタビュー 16. Mar. 10

大島弘子先生（パリ・ディデロ第7大学東洋言語文化学部日本語科准教授）  
と面談（於パリ・ディデロ第7大学日本語科オフィス）

#### 1. 日本語科

・教育目標と設置科目について：本来、日本学研究者養成であり、古典や文化に関する授業科目が中心であったが、近年は、就職に結びつく授業を希望する学生が増えていることが学生評価からわかる。同時に、大学の新方針もPPP(projet professionnel personnalisant)という単位を導入しようとする方向に向かっている。たとえば、日本語科の3年次のPPPは、日本語能力試験2級準備講座、履歴書を書く授業と外部の職業人及び卒業生による就職のための講演とが組み合わさった授業である。PPPの導入等により大学の専門学校化が

進んでいるということが言えよう。

・日本語学科の教員の構成と専門：

教授：セズレ先生（法学）、坂井セシル先生（現代文学）、堀内アニック先生（自然科学史）

准教授：ハイエック先生（歴史社会学、知識社会学）、中島先生（言語学）、大島先生（言語学）、ストルブ先生（古典文学、近松門左衛門、井原西鶴）、ブリセ先生（美術史）、アーモン先生（経済学）、矢田部先生（社会学）、広瀬先生（デザイン）

・学生数：1年次 200人（実際にテストを受けるのは150人）、2年次は編入生も含めて100人ぐらいになる。

・使用教材：1年次『みんなの日本語Ⅰ』、週1課ずつ進み、25課を1年間で修了する。

2年次『みんなの日本語Ⅱ』

会話・聴解担当の教員が2年毎に交代することから、引き継ぎがしやすいように副教材が揃っているこの教科書を用いている。

・科目構成：日本語（文法）週1時間半 漢字 週1時間半

会話（基礎、応用） 週3時間、文法練習 週1時間半

読解 週1時間半

3年次には、日本語能力試験準備講座、履歴書を書く授業などが加わる。

・日本語学習の動機としては、J・POP、ファッション、メイド喫茶、化粧法などサブカルチャーの影響が挙げられる。

・学習上の困難点としては漢字の学習が挙げられる。

2. 日本留学：3年生70人のうち20人ほどが一年間留学を希望し、その中の10人ぐらいが日本に留学できる。

・交換留学協定校：神戸大、名古屋大、お茶の水、法政大、ICU、関西大、和歌山大、福岡大、武蔵大、立命館大、奈良女子大、東大

・日本留学者は、成績、志望動機書などにより選抜される。

・留学後の状況：日本語の総合力が上がり、他の学生とレベルに開きが出ることから、日本語の授業は参加免除になる場合が多い。

3. 卒業後の進路

3年で卒業の場合：多くが日本語を使わない職業に就くが、まれに任天堂、マキシムなどに就職したり、警察官など日本語を使用する職業に就く者もいる。

修士課程 2 年修了の場合：日本関係の仕事に就く可能性が高くなる。

また、アグレガシオン日本語専任教員の試験を受ける資格が出来るので、この試験に合格すればアグレジェとして高校或いは大学の教員になることもできる。

#### 4. 大学院

- ・修士課程 2 年生以上を指導するには **Habilitation** (昔の国家博士号) が必要である。それを得るためには、少なくとも研究書 1 冊、論文 20 本、編集書 1 冊が必要となる。**Habilitation** を取得した **Habilité** は教授のポストに応募できる。准教授は修士課程 1 年生を指導できる。
- ・学生数は修士課程 1 年生 30 名～40 名である。
- ・研究領域としては、矢田部先生の指導による社会学専攻が最も多い。近年の研究テーマとして、失業、部落問題、ニート、格差、ポップカルチャーなどが挙げられる。日本語学専攻は 6 名である。
- ・ほとんどの博士課程の学生は、日本へ留学し、修士課程 1 年生も 5 名ぐらいが留学している。
- ・日本学の博士号取得者は、フランス全国で年間 1 名～3 名程度である。

東京外国語大学に対して、教師間の教材開発、教員レベルでの研究、単なる名前貸しではなく実質的な協働的研究を行いたいとしている。

グルノーブル・スタンダール第三大学 Université Stendhal-Grenoble3

インタビュー 17. Mar. 10

東伴子先生（グルノーブル・スタンダール第三大学、外国語学部東洋言語学科日本語科准教授、フランス日本語教師会会長）と面談（於グルノーブルスタンダール第三大学）

日本語学習者は、1 年次で 120 名にもおよび、そのうち既習者が 50 名ほどいる。初心者は 2 年かけて 1 年次を終了し、既習者は 2 年次の 2 年目から入る。教科書は、『日本語で話しましょう I』（東伴子・小熊和郎著）、『日本語で話しましょう II』（東伴子著）(グルノーブル大学出版)が使用されている。2 年次に履修者は 30 名ほどに減少する。

授業科目は、「日本の文化」、「文法・翻訳」、「演習（会話・タスク）」が各週 2 時間のほかに、1 年次 1 年目はラボと漢字の授業が各週 1 時間加わる。

日本語科の専任教員は、准教授が 2 名、契約講師が 5 名でいずれも日本人である。そのほかに非常勤講師が 1 名いる。

日本の漫画やファッションに魅かれたことから、言葉にも興味を持ち、さらに、日本的な物の考え方や奥ゆかしさなどを知って日本が大好きになり、日本に関する知識を深めようとするのが、日本語学習の継続や日本語能力の向上につながり、結果として就職に結びついているという。

学生は文法の勉強に興味があるが、会話練習などを軽視する傾向があるようだ。

卒業後は、ビジネス系の高等専門教育機関 (*grandes écoles*) に進むか、大学院に進学する。あるいは、ワーキング・ホリディで日本に行く者もいる。

#### 授業見学：吉田睦先生による会話の授業

タスク・シートを使い、フランスやグルノーブルのおすすめスポットを地図で示しながら訪問者に紹介するタスクが行われた。



日本語のクラス 東伴子先生（左）と吉田睦先生（右）



#### 学生によるスピーチ：グルノーブルの見所紹介



図書館の日本語教材

#### フランス日本語教師会の活動

毎年開催するフランス日本語教育シンポジウムや、年数回の勉強会、教師会便り発行などの主活動を通して、フランスにおける日本語教育の質向上と日本語教師同士のネットワーク構築を目指している。また国際交流基金・パリ日本文化会館や在仏日本国大使館などと協力してフランスにおける日本語振興活動を行っている。

## フランス国立東洋言語文化学院

Institut national des langues et civilisations orientales

インタビュー 19. Mar. 10

上田眞木子先生（フランス国立東洋言語文化大学日本語科准教授）と面談、授業見学（於フランス国立東洋言語文化大学）

Institut national des langues et civilisations orientales（フランス国立東洋言語文化大学、通称 INALCO）という名称を採用したのは1971年だが、学校自体は1669年にコルベールが近東諸国との通訳を養成するために創設した言語青年学校（Ecoles des jeunes de Langues）を母体としている。

INALCOでは、文明講座と語学に同じ比重を置くことを原則としている。また、日本の文明講座の一部を、日本語を履修していない学生に開放している。

### 1. 学部組織

アフリカ学部 南アジア学部 東南・東アジア・太平洋学部 中国学部 アラビア学部 ユーラシア学部 中・東欧学部 日本学部 ヘブライ・ユダヤ学部 ロシア学部 アメリカ学部 文化間コミュニケーション育成学科 国際交流予備センター 外国語としてのフランス語学科 国際高等研究学科 他言語コンピュータテキスト学科から成る。

### 2. 学年の構成

基本的に、3年で履修する学士号と2年で履修する修士号より構成される。これらは国家が認定した学位だが、日本学部を含む多くの学部で、1年ごとに取得できる国家認定外の学位を設けている。また、中国学部のように、学士号の取得に4年を要する所もある。

博士課程は、INALCO 全学部共通の Ecole doctorale という別組織の運営で、

日本関連の場合、「世界の言語、文学、社会」日本専攻の博士ということになる。日本学専攻のために博士課程の受け皿として、日本研究センターが存在しているが、同センターに属する研究者の過半数が日本学部の教員である。

### 3. 学期の構成：

2学期制。1学期は10月から1月、2学期は2月から5月までで、学年末に試験があり、両学期の追試は6月、あるいは6月と9月に分けて行われる。

### 4. 教員数、学生数について：

INALCO 全体の教員数は、250名、学生数は約10,000名おり、そのうち、日本語学部の教員は30名、学生は1000名程度である。

教授、准教授には古典から現代までの文学、美術を専門とする者が多く、日本語教育の専門家はいない。現在、現代社会を対象とする諸部門の強化をはかっているところである。常勤講師は、多くの場合言語学、日本語学、語学教育学を専攻している者が多い。

### 5. 日本語科の学生について

日本語学習の動機として、日本に対する子ども時代からの憧れを理由に挙げる学生が多い。人数的にははじめは決して多くないが、日本人家庭や日仏家庭の子弟や、日本に滞在していた学生も増えており、学年が進むにつれてその割合は増えていく。また、毎年20～30名程、日本の大学を卒業した日本語話者が学士課程に在籍しているが、彼らはフランスにおける日本語教師としてのキャリア構築を考えていることが多い。

フランス国内において、日本の独立法人化に相当する自立化が検討されており、INALCOも2010年から自治組織となった。教員研究者は研究実績のみによって評価されるため、語学教育に力を入れる教員は、今後の評価が低くなることもありうる。

(以上は上田眞木子氏による)



上田眞木子先生と修士課程の学生たち

プロバンス大学 **Université de Provence**

インタビュー 20. Mar. 10

ユキ・ファブネク氏（プロバンス大学日本語学科准教授）

秋廣尚恵氏（プロバンス大学日本語学科専任講師）と面談（於プロバンス市内）

1. 日本語学科の教員：専任講師 5 名（日本人 2 名を含む）、非常勤講師 2 名（いずれも日本人）、チューター 2 名（フランス人 1 名・日本人 1 名）
2. 日本語の授業
  - ・ 文法、漢字、日本語からフランス語への翻訳(*Version*)、作文(*Thème*)、口頭表現、ラボ等の科目がある。
  - ・ 授業時間は、文法、漢字、翻訳(*Version*)の講義式授業が週 3 時間。さらに、この講義の復習として、書く練習（作文(*Thème*)と漢字)、口頭表現、ラボの TD(実習)が各週 1.5 時間ずつある。
  - ・ 教科書は、1 年次『げんき I』（坂野永理他著）、2 年次『げんき II』、3 年次は各クラスで授業計画を立てる。  
2011 年は、環境問題、墓の問題と日本人の宗教意識、若者の雇用問題、高齢社会といったテーマについて総合学習を行った。
  - ・ 翻訳の授業では、雑誌『世界』の文章をモデルとして使用している。
  - ・ 会話の授業では、映画、ドキュメント、ドラマ、ラジオ、NHK ニュースなどのオーディオ・ビジュアル教材を活用し、口頭発表や討論を行っている。

当該大学は、近年、文法積み上げに重点を置き、多くのドリル練習など緻密な指導を行うことにより、学生たちのスキル面での日本語能力に向上が見られ

るようになった。2009年には、全仏スピーチ・コンテストにおいて、同学から第4位入賞者を出すといった成果が挙げられている。



秋廣尚恵氏（左）と中田俊介氏（東京外国語大学博士後期学生、プロバンス大学留学）

## 国際交流基金パリ日本文化会館

インタビュー 22. Mar. 10

近藤裕美子氏（国際交流基金パリ日本文化会館日本語教育アドバイザー）と面談（於パリ日本文化会館）

パリ日本文化会館には、2005年より日本語セクションが設けられた。訪問時は、日本より派遣された2名の専門家（近藤裕美子日本語教育アドバイザー、村中雅子日本語教育指導助手）を中心に、教師や学習者の支援、日本語教育情報の提供と収集や日本紹介等の日本語教育普及事業を行っていた。

教師支援としては、週1回の日本語教師相談日を設けて教授法、教材、教室活動等に関するアドバイスを行うほかに、コースデザインの方法、教授法や教材の紹介、「教師のためのITリテラシー」研修などを年3回程度開催している。その他、地方へ出張し教師研修も行っている。

学習者支援として2009年10月から開講された中級日本語コース（B1講座）では、CEFR, JF 日本語教育スタンダードに基づいて授業が行われている。上級（c1レベル）向けとして、日本をテーマに各時代の社会背景について学べる講座も開かれている。

2010年3月には、CEFRのコンセプトを参考にした「JF 日本語スタンダード 2010」が公開されている。

## 総括

フランスの日本語教育環境では、従来日本文化や歴史など日本学のコンテンツ重視の教育が行われており、日本語の授業においても日本語からフランス語

への翻訳に時間をかけるなどその影響が見られていた。

しかしながら、近年は **CEFR** による **EU** の言語評価基準の標準化、国策としての実学重視や学習者の学習動機の変化等から言語スキルの向上にも力点が置かれつつある。

今後は、コンテンツと言語スキルのバランスを考えた総合的なカリキュラムの構想や各科目の授業内容が問われることになるであろう。そのためには、教室活動の見直し、IT リテラシーの多用、現地の教員と日本人教員のタイアップはもちろんのこと、これまで国内で蓄積された独創性の高い日本研究コンテンツをいかに言語教育に取り込むかということに知恵と工夫が注がれ、フランスらしい日本語教育が行われることを期待する。

(2011.3.29 修正)